# 機動戦士Ｚガンダム　～ナガノの逆襲～

雷紋寺　音弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士Ｚガンダム　～ナガノの逆襲～

【Ｎコード】
Ｎ６５６６Ｍ

【作者名】
雷紋寺　音弥

【あらすじ】
独創的な発想を持ちながら、その全てを理解されることなく行き場を失ってしまった一人の男。彼が目を覚ました時、そこは軍の施設と思しき見慣れぬ一室だった。
俗にナガノデザインと呼称されるＭＳをネタに扱った、驚愕のＭＳ開発秘話。
戦闘シーンなしの、ちょっと異色なガンダム作品。

周囲を無機的な壁に囲まれた静かな部屋で、その男はゆっくりと目を覚ました。

気がつけば、自分がそこにいたという状況。自分はなぜここにいて、そもそも何をしていたのか。

未だ完全に覚醒しない意識の糸を手繰り寄せながら、男は自分の手足の先、体の細部までの動きを確認するかのようにして、慎重に起き上がった。

そもそも自分は、なぜこのような部屋に閉じ込められているのか。男にとって目下解決すべき問題はそれであった。

ここ最近、自分は確かに荒れていた。仕事は全くうまくいかず、やりたい仕事も満足にさせてもらえず、果てはアルコールと精神安定剤に全てを委ねるような生活を続けていた。それが災いし、自分でも知らぬうちに傷害事件でも起こしてしまったのかと、最初はそう考えた。

しかし、彼が置かれているこの部屋は、留置場にしては妙な作りをしていた。

部屋にはベッドが一つと机が一つ置いてある以外にはほとんど何もないが、留置場としてはやけに小奇麗な場所だった。加えて、あの牢獄を連想とさせる独特の鉄格子もなく、代わりに彼の目の前にはシャッタータイプの自動ドアが備え付けられている。丁度、宇宙戦艦の個室に用意されるような、カードキーで開けるタイプの自動

ドアだ。

「はて……。こいつはとうとう、僕の精神も末期的なところまで来てしまったのかな？」

先ほどまで全身を覆っていた細かな痺れが治まってゆくのを感じながら、男は自嘲するかのような口調で独り呟いた。ここが留置所や刑務所の類でないのであれば、半ば廃人同然の自分が放り込まれる可能性のある場所はただ一つ。『精神病院』という名の、留置場よりも危険で厳しい牢獄だ。

だが、男がそこまで考えた時、突如目の前の扉が開き、二人の人間が現れた。その者達は人目見て軍人のそれと分かる格好をしており、同時に彼らの着ている軍服は、男にとっても馴染みの深い、それでいて懐かしいものだった。

「お目覚めですか、博士。こちらにお越しいただくに当たり、部下に手荒な手段を用いさせてしまい、申し訳ありません」

「これはまた……よりにもよって、ジオンの軍人さんのお出ましとはね。僕はてっきり、自分の頭がイカれて病院に強制収用されたのかと思ったよ」

「拉致という強硬な手段を取らせていただいたことに関しては、部下に代わり私が謝罪いたします。しかし、ことはそうのんびりしていられる状況ではありません」

「のんびりしていられない？　言っておくけど、僕は連邦政府の要人でもなんでもないからね。僕を人質にして連邦軍と取引をしようとしたり、アナハイムから金を巻き上げようったって、無意味だと

思うよ」

先ほどからあくまで飄々とした態度を崩さない男に対し、二人のジオン兵は思わず嫌悪感を露にした表情を男に向けた。が、しかし、そこは任務に忠実なことを要求される軍人である。すぐさま気を落ち着けると、再び男に向かって話を続ける。

「我々が博士をここへお連れした理由は他でもありません。あなたのお力を借りたいと、こう考えているからです」

「僕の力を？」

「そうです。我々はあなたに、我が軍の旗機を設計・開発していただきたいと考えているのです」

「旗機を！？　冗談だろう、君……」

目の前にいる兵からの突然の要求に対し、男は思わず必要以上に驚いた素振りを見せて反応した。

確かに自分は、かつてジオン公国に身を置き、その後も時代の最先端を行く発想の持ち主としてもてはやされた人間である。今でこそ旧式機の一例としてその名を上げられてしまうガルバルディβであるが、あれは一年戦争の終結後に彼が連邦へと下った際に、ジオンのガルバルディαを改修する形で設計・開発したものだ。

だが、それ以降、彼は目立った功績も残すことなく、今や技術者仲間の間でも『地に堕ちた天才』とか『時代に乗り遅れた奇才』などと酷評されている始末である。そして、その果てに薬とアルコールに手を出して、廃人の一歩手前まで行ってしまった無様な人間な

のだ。そんな自分に拉致という強硬手段までとって旗機を開発させようとする者達がいるとは、彼にはどうしても理解できなかった。

ところが、そんな彼の考えを打ち砕くかのようにして、目の前のジオン兵はあくまで冷静な口調で男に迫った。

「冗談ではありません、博士。それにこの以来は、我らが摂政であらせられる、ハマーン・カーン様の勅命でもあります」

「ハマーン・カーン！？　ってことは、ここは小惑星アクシズなのかい！？」

「その通りです。連邦の無能どもは博士のことを酷評しておりますが、我々は博士の真の才能を理解しているつもりです。それに、あなたも一度はジオンにその身をおいた者。敗戦という不本意な形で連邦に組するしかなかったとはいえ、そろそろそれも、潮時ではないかと思いますが……？」

「やれやれ……。僕も随分過大評価されたものだね。まあ、それでも今はこんな状況だったし、これが僕の生きる、新しい道標になればそれもいいかな」

「では、我々に協力していただけると？」

「そう解釈してくれて構わないよ。その代わり、やるからには僕の好きにやらせてもらうからね。僕の頭の構造が普通とちょっと違うっていうことは、君たちも当然理解しているはずだよね？」

ジオン残党軍、アクシズによる拉致。その衝撃的な事実を突きつけられたにも関わらず、男の目には既に新たな光が宿っていた。そ

れは、先ほどまでこの部屋で兵士と問答を繰り返していた男にはなかった輝きである。そしてまた、かつて男がガルバルディβを開発して以来、徐々に失ってしまった輝きでもあった。

確かに連邦政府やアナハイムは自分の才能を買ってくれたかもしれないが、同時に自分は、ジオン系の技術者という好奇と偏見の目に常にさらされてもいた。そして、連邦政府や同じ技術者仲間からも役立たずの烙印を押されてしまった今、確かに目の前の兵士が言うように、一つの転機が訪れようとしているのかもしれない。

「じゃあ、とりあえず、僕の要求するＭＳやＭＡのデータは全部頂戴ね。それと、同じ目的で現在進行中のプロジェクトがあったなら、それに協力させてもらう形でも構わないよ」

「ええ、分かりました。では、改めて、博士にアクシズの中を案内いたしましょう。ハマーン様も、あなたの才能には期待しておられますのでね、Ｍ・ナガノ博士……」

そう言うと、二人組みのジオン兵は部屋のドアを開け、それに続く形でナガノと呼ばれた男も部屋を後にした。そしてこれが、後にグリプス紛争、第一次ネオ・ジオン抗争を駆け抜けた純白の旗機を誕生させ、果てはＭＳに搭載する武器の種類に新たな一石を投じることになろうとは、この時は誰も予想していなかった。

※　※　※　※　※　※　※　※

「ええっ！　私があの、ナガノ博士の受け持っているプロジェクトに参加するんですか！？」

マリア・リバーヴィレッジ技術少尉は、上官からの突然の命令に、思わず自分の耳を疑った。

確かに自分はアクシズのＭＳ開発部門に所属しているが、それでも自分独りでＭＳを開発したことなど一度もない。せいぜい、ガザ・Ｃの開発に少々関わった程度であり、後は主に現場でのメンテナンス作業や新型機のテストを中心に働いていた。

そんな自分に、ハマーン様の旗機を作るプロジェクトへの異動が回ってくる。これは素人目にも、何か裏があると思って間違いない。

「すいません……。まことにありがたいお言葉ではあるのですが……。恐れ多くもハマーン様の乗る機体を開発するなんて、私にはちょっと荷が思い気が……」

「何を言う！　我らが摂政、ハマーン様のお乗りになられる機体の開発に関われるなど、これほど名誉なことはないぞ！　もっとも、お前にやってもらうのは開発そのものではなく、開発を任されたＭ・ナガノ博士の補佐役だが……」

「補佐役？」

「そうだ。現状でハマーン様の乗機開発に関わっているプロジェクトは二つあるが、どうもナガノ博士が所属しているチームの方で、人間関係のいざこざがあったようでな……」

「人間関係のいざこざ、ですか……」

「そうだ。仮に我がアクシズに当初から設立されていたチームをチ

ームαと呼称すると、ナガノ博士が主体で開発を進めているチームβは、博士とスタッフとの連携が取れていないようなのだ。このままではチームαの考えている設計案で通すしかなくなるが……その案とて、採用を疑問視する声も少なくはないからな」

「なるほど……。それで私にナガノ博士を補佐し、プロジェクトが失敗に終わるのを未然に防げ、と……」

案の定、裏があったことに対し、マリアは溜息をつきながら視線を下に向けた。人間関係に起因する問題が加わった場合は、その解決は新型ＭＳの開発よりも難しい。だが、それが解決しない限り、ナガノ博士をアクシズにまで連れてきた意味はなくなってしまう。

競合試作。ジオン公国が一年戦争の際から続けている、兵器開発プロジェクトの方向性である。異なる企業や異なるプロジェクトチームに同様のテーマで兵器の開発を受注し、試作コンペティションで勝ち残った方を正式採用するというものだ。

競合試作の発想はジオン公国が一年戦争の準備を開始した当初から存在したらしく、古くはＭＳ－０５ザク？とＥＭＳ－０４ヅダの開発経緯にまで遡る。それ以外にもＭＳ－０６Ｒ－２高機動型ザクとＭＳ－０９Ｒリックドムとの競合や、ＹＭＳ－１４ゲルググとＹＭＳ－１５ギャンの競合なども有名である。

互いに同じコンセプトの下、時に技術交換を行いながらも、最終的には試作コンペティションで争い合う。こうしたやり方の中で重要となるのは、やはり各開発チーム内の連携となる。

それぞれのチームがきちんと仕事をしてくれれば、互いに切磋琢磨した結果、優れたＭＳの開発にこぎつけることもできるだろう。

しかし、チーム内の連携が悪く、開発プランそのものが右往左往するようでは、単に投機的な開発をしているだけになってしまう。

チーム内の連携は、絶対に必要不可欠。最悪の場合、自分だけでもナガノ博士を補佐しなければ、チームβがまともな旗機を開発することなどできはしない。

要するに、厄介ごとを押し付けられただけということを理解したマリアではあったが、この命令に逆らうことが許されないということは、上官の目を見れば、最早明らかなことであった。

※　※　※　※　※　※　※

初めにマリアがナガノの自室を訪れて目にしたのは、膨大な量のＭＳの設計図であった。が、しかし、それはナガノ自身が設計・開発したものではない。

旧ジオン系のザクやドムといったＭＳの図面を中心に、一年戦争末期に開発されたＭＡの設計図や、彼の頭の中に入っていたと思しき連邦系ＭＳの設計図を書き起こしたものもある。それらの図面が部屋の壁面に所狭しと貼り付けられ、壁に収まりきらないものは、床にそのまま散在していた。

「ああっと！　そこの図面、踏まないでよ！　今、アクシズ系列のＭＳの構造を、改めて見直しているところだから……」

机に向かったまま突然声を上げたナガノに対し、マリアは思わず肩をすくめて強張った。こちらに背を向けたままだというのに、何

故自分が設計図を踏んだことが分かったのだろうか。後ろにも目があるのではないかと思わせるナガノのその行動に、マリアは思わず彼がニュータイプなのではないかという錯覚を覚えた。

「あっ、すいません……。えっと……本日付けでこちらのプロジェクトに参加させていただきます、マリア・リバーヴィレッジと言います。以後、よろしくお願いします！！」

「あっそう。僕は補充人員を頼んだ覚えはないけど……まあ、人手が増えるに越したことはないしね。とりあえず当面は、僕の頼んだデータ類を持ってきてくれないかな？　設計図もありがたいんだけど、やっぱり図面だけじゃ限界があるんでね」

「は、はぁ……」

自分に背を向けたまま話を続けるナガノに対し、マリアは思わずその雰囲気に呑まれて返事を返してしまった。

彼がアクシズに拉致されて以来、変わり者が来たという噂は聞いていたが、これは予想以上だ。初対面の相手をいとも簡単に自分のペースに巻き込んでしまうこの男には、やはり何か普通とは違うものを感じる。

「あっ、そう言えば、ここに来る前に聞いたんですけど……。チームβに所属している他の人たちと折り合いが悪いって話……実際のところはどうなんですか？」

足元の設計図を踏まないように注意しながら、マリアは思い出したかのようにナガノに質問した。それを聞いたナガノは、今度は椅子を半回転させ、マリアの方に向き直る。

その顔は、以前に彼がアルコールと薬物に依存していたとは思えないほど、活力に満ち溢れていた。マリア自身、以前に上官から写真で見せられたナガノの顔とはあまりにも異なることから、思わず別人ではないかと思ったほどだ。

「まあ、アクシズお抱えの専属チームから比べれば、外様の僕は明らかに邪魔者なんだろうけどさ……。それでも僕は、彼らに僕なりの見解を述べさせてもらったつもりなんだけどねぇ……」

「博士の見解を述べられたのですか？」

「そうだよ。彼らは最初、ノイエ・ジールの発展系ＭＡを旗機として考えていたようなんだ。でも、僕としては、あんなデカイだけでパイロットの負荷の方が大きい機体ほど、旗機に不向きなものはないと思うんだよ。それに、使用場所も宇宙に限定されてしまうしね」

「は、はぁ……」

「あれは、どっちかというと……後ろで指揮をするような機体じゃなくて、火力と機動性を生かして戦艦を一隻ずつ潰して行くような機体さ。でも、一年戦争当初ならともかく、今の連邦軍はＭＳの重要性も理解している。どんなに強力なＭＡでも高い機動力を持ったＭＳの群れに飛び込んで、無事ですむはずがない」

「確かに、それはそうですね……。今の連邦軍も、大艦巨砲主義は、少しずつ影を潜めているみたいですし……」

「そうだろう？　そこで、もっと別の視点から再設計してみたらどうかと提案したら、彼らは何と言ったと思う？」

半ば軽蔑したような態度を露にし、ナガノは下から見上げるような視線をマリアに向けた。そして、彼女が答えを言うよりも先に、わざと両手を大げさに広げてこう答えた。

「なんとあいつら、ビグザムの発展系を開発すると言い出したんだよ！　僕、思わず笑っちゃってさぁ！！」

「でも、ビグザムって言えば、一年戦争のソロモン戦で、連邦軍に大打撃を与えたＭＡですよね？　防御力も高そうなのに、どうして駄目なんですか？」

「確かにあの機体は、拠点防衛及び攻略用としては優れているさ。でも、それはあくまで拠点防衛、攻略という、限られた条件下でのものだろう？　作戦行動が可能な時間も短いし……加えて、これはノイエ・ジールもそうだけど、Ｉ・フィールド搭載機は図体が大きすぎることが最大の欠点だよ。装甲を厚くすれば多少の被害は防げるとはいえ、強力な実弾兵器には基本的に無力だ。それに、高出力のビームを一点集中で浴びせれば、Ｉ・フィールドだってその力場を崩壊させられる。しかも、敵ＭＳに接近されてビームサーベルで斬りかかられたら、その時点でお終いだしね。あの、鉄壁防御を謳ったビグザムでさえ、最後はガンダムのビームサーベルで真っ二つにされてしまったそうじゃないか」

「な、なるほど……」

「だからこそ、僕はビグザムの使用にも反対したんだけど……逆に『ミネバ様のお父上の乗機を馬鹿にするのか！！』と、逆ギレされちゃったんだよね。僕としては、旗機と拠点防衛・攻略用のＭＡでは、設計コンセプトが根本的に違うって言いたかったんだけど……」

「つまり、それが今のスタッフ達と、博士の確執の始まりというわけですね」

「まあ、そんなところかな？　アクシズはザビ家の思想に賛同した者の集まりだから、彼らの感情も分かるよ。それでも、もう少し客観的に物事を見て欲しいとは思うね」

半ば、諦めの入った表情を浮かべながらも、ナガノはマリアに淡々とした口調で持論を説いた。

普通であれば、聞いている途中で飽きてしまうことだろう。しかし、それを聞いたマリアは、むしろナガノの話にすっかりのめりこんでいた。

確かに彼の言い方にも問題があったのかも知れないが、それでも話の内容は的を射ている。冷静に考えれば、ビグザムやノイエ・ジールにはそれぞれの、また、彼が開発しようとしている旗機には旗機の、兵器としての役割があるのだ。ジオンの理想やザビ家の精神を前面に押し立てるだけの他の技術者とは異なり、マリアにはナガノが生粋の技術者であると感じた。

「じゃ、ここらで僕は、仕事に戻らせてもらうよ。その間に君は、一年戦争時代に開発されたものを中心に、サイコミュ兵器搭載機のデータを集めてきてくれないか？」

「サイコミュ搭載機？」

再び椅子を回転させ机に向かったナガノに対し、マリアは思わず訝しげな表情を向けた。

ハマーン様には確かに高いニュータイプの素養があるとされてはいるが、とすれば、ナガノ博士は、ハマーン様の搭乗される旗機にサイコミュを搭載するつもりなのだろうか。

「とりあえず、試作機や実験機も含めたサイコミュ搭載機のデータを一通りお願いね。それと、実際の交戦データがあったら、それも頼む。エルメスやジオングなんてのは、実際にガンダムと交戦しているわけでしょ？」

「は、はい……。どこまでできるかはわかりませんが、とりあえず、私にできることであれば、頑張らせていただきます！！」

どこか不思議な雰囲気のあるナガノのペースに戸惑いながらも、マリアは思わず力強い返答で彼の言葉に答えた。

目の前の男が何を考えているのか、全てを分かることはできなかったが、彼女には一つだけ確信したことがある。それは、ナガノが今までの固定概念や思想に縛られることのない、技術者としては最も純粋な人間なのだということであった。

※　※　※　※　※　※　※

翌日、マリアがナガノの姿を見かけたのは、彼がラウンジで食事をしているところだった。

もっとも、食事といってもまともなものを口にしているわけではなく、コーヒーにクラッカーといった簡素なものだ。新型の設計に

時間を追われているナガノにとっては、食事など仕事をしながらでも食べられる合成食の方が合っているのだろう。それにも関わらず彼がラウンジに出てきているということは、休憩を兼ねた軽食を取っているだけなのかもしれない。

「すいません、博士。ご一緒してもよろしいですか？」

目の前に自分が立っていることにも気付かずにコーヒーカップを手にして悩んでいるナガノに向かって、マリアは少々声を大きめにして話しかけた。

「んっ……？　ああ、君か。僕は別に構わないけど……それより、頼んでおいた例のサイコミュのデータ、見つかった？」

「あっ、はい。古いものはザクタイプのサイコミュ試験機からジオングまで、新しいものは、トゥッシェ・シュバルツなんかも……。一応、該当しそうなものは一通り揃えてみました」

「ふーん、ザクにジオング、それにトゥッシェ・シュバルツね……。データを見てみないと詳しいことは分からないけど、とりあえず参考にさせてもらうよ。それと、またまたお願いで申し訳ないんだけど、今度はサイコミュそのものに関してのデータも集めてくれないか？　フラナガン機関が研究していた資料なんかがあれば最適だけど……」

フラナガン機関。その名にはマリアも聞き覚えがあった。一年戦争当時、ニュータイプの発する超能力にも似た脳波、サイコウェーブの研究を行い、後のサイコミュ研究に大きく貢献したとされる研究機関の名称だ。

その実績は有線式サイコミュの開発だけに留まらず、無線で動くビットなる兵器や、サイコミュを利用した機体の追従性向上の研究、果てはＥＸＡＭなる、正体不明のシステムを開発していた研究者もいたと聞く。その機関が残したデータを欲するとは、ナガノはいよいよハマーン様の搭乗される旗機に本格的なサイコミュシステムを取り込むつもりなのだろう。

だが、やはりそうなると気になるのが、ナガノがどのような機体を開発しようとしているのかである。先日、彼の作業部屋を訪れた際には、それを聞きだすことはできなかった。否、それ以前に、正確な設計図が現段階であるのかさえ疑問だ。仮にあったとしても、それはナガノ自身の頭の中にしまわれているのかもしれない。

「すいません。こんな事を聞くのは恐縮なんですけど……」

「なんだい？」

「博士はいったい、どんな機体を開発されるおつもりなんですか？」

「どんな機体、ねぇ……」

自身の目の前に座るマリアから唐突な質問を受け、ナガノはしばし考え込んだ表情をした。が、すぐにいつもの表情に戻ると、悪戯っぽい笑みを浮かべたまま、やや勿体をつけるようにして答えた。

「僕が作りたいのは……ジオンのガンダムさ」

「ええっ！？」

予想だにしなかった返答を受け、思わず声を上げるマリア。確か

にガンダムと言えば伝説のＭＳとして名高いが、あれは連邦軍の開発した機体だ。いくら高性能機の代名詞とはいえ、旧ジオン軍を母体とするアクシズでガンダムを開発しようなどとは正気の沙汰ではない。

そんなマリアの反応を見越したのか、ナガノはすぐに申し訳なさそうな顔をして言葉を補った。

「いや、悪い。別に僕は、ガンダムタイプのＭＳを作りたいって意味で言ったわけじゃないよ。ただ、一年戦争の時のガンダムみたいに、単体で一軍を圧倒するような存在感を持ったＭＳを作りたいって思ったのさ」

「な、なんだ……。もう、驚かさないでくださいよ……」

「だから、悪かったってば。でも、旗機ってやつは見た目や性能をひっくるめた全ての点において、敵味方共に印象深いものにしなければならないからね。敵は旗機の姿を見て恐れおののき、味方はその姿に鼓舞されて士気を上げる。存在そのものが、既に戦略の一環なんだよ。これはそのまま、連邦のガンダムにも当てはまる。だからこそ僕は、アクシズにとってガンダムのような存在になる機体を作りたい。それこそが、僕の目指す旗機のコンセプトさ」

「なるほど、アクシズにとってのガンダムですか……。まあ、確かにガンダムの存在は一年戦争で半ば伝説化しましたからね。ティターンズがガンダムＭｋ－２を開発したのも、象徴的な意味合いが強かったみたいですし……」

相手の言葉に合わせる形で、マリアは何気なくＭｋ－２のことを口にした。本人にしてみれば、ガンダムの存在そのものが戦略とし

て使われようとした例を挙げたつもりだったのだろう。

しかし、彼女の口からＭｋ－２の名前が出たその瞬間、ナガノは急に表情を強張らせ、先ほどとは異なる侮蔑に満ちた口調で呟いた。

「Ｍｋ－２か……。あんなものは、時代が産んだ愚作だよ……」

ラウンジには他の人間達もいるというのに、その瞬間に限り、マリアはまるで時が凍りついたかのような静寂を感じていた。先刻とは明らかに違う場の空気に、思わず押しつぶされそうになる。

目の前のナガノの瞳には今までのような輝きはなく、むしろ憎しみとも悔しさとも取れる、微妙な感情が渦巻いていた。

「歴史上、初めてムーバブルフレームを用いたのはガンダムＭｋ－２だって言われているけどね……アレ、もともとは連邦系技術者から出たアイデアじゃなくて、僕が考案したものだったんだよ」

周囲を包む重たい空気が引かぬまま、ナガノはマリアに淡々とした口調で語る。

「ガルバルディβの開発が終了した時点で、僕はＭＳの設計思想に一つの終わりが来たことを感じたんだ。従来のＭＳの構造のままでは、次世代の優れた量産機を開発するのは無理がある。ハイザックなんか、そのいい例だね」

ハイザック。連邦軍が戦後にジオンのザクを研究して完成させたＭＳであるが、ジェネレーター出力に致命的欠陥を持つ機体。その出力の問題から、ビームサーベルとビームライフルの同時携行が不可能という欠点を抱えていたことは有名である。

「新世代のＭＳには、ビーム兵器の標準装備が当たり前になる。ジェネレーターの出力向上も必要だけど、僕はそれに加えて、フレームと装甲を別々に生産するというアイデアを考案したんだ。でも……当時の連邦系技術者達は僕がジオン系技術者というだけで、そのアイデアを一笑にふしたんだよね。まあ、結果としては、今までのやり方では時代の要求に応えられなくなって、彼らは僕に無断で、ムーバブルフレームを使用した機体を開発してしまったんだけど……」

「そんな……！　それって、あからさまな技術盗用じゃないですか！？」

「そうだよ。しかも、それを使ってＭｋ－？を開発したフランクリン・ビダンという男。彼は技術者としてはそれなりだったようだけど、僕から言わせれば最悪だった」

「それは……博士の考案したアイデアを盗用したからですか？」

「まあ、それもそうだけどね……」

自分の心の内に溜まっていた事柄を吐き出してか、先程に比べ、ナガノの口調はいささか穏やかさを帯びてきていた。が、それでも、彼は大きな溜息をついたのち、再びマリアに向かって話を続けた。

「フランクリン・ビダンはムーバブルフレームの真の価値を理解していなかった……。そもそも、僕はこのフレームを、量産型ＭＳの稼働率向上という点に注目して考案したつもりだったのさ。フレームと装甲を別々に作れば、生産だけでなく整備も修理も楽になる。加えて、貫通力は高いが一撃の破壊力では大型の実体弾に劣るビー

ム兵器への対策を考えた場合、装甲を厚くするよりも、貫かれた腕や脚を効率よくリペアできた方がいいのさ」

「な、なるほど。防ごうにも防げないものを無理になんとかしようとするよりは、急所を外して当てられた場合の事を考えて、修理という行為そのものを耐ビーム対策にするというアイデアですね」

相手の話を聞き漏らさないように意識をはりつつも、マリアはナガノの説明を素早く頭の中で反芻して応対する。

ビームを無効化する策は一年戦争当初から様々な案が考え出されてきたが、当たった後の事を考えてビーム対策とする案は初めてだ。装甲版で防げないものは仕方がないと割り切って考える辺り、いかにも奇抜な発想を持つナガノらしい。

「まあ、ムーバブルフレームが開発された裏にはそんなこともあったんだけど……問題は、それを使って作られたMSさ。ガンダムMk－？は装甲材の陳腐さもさることながら、僕の考えたムーバブルフレームの長所を、完全に殺してしまっている」

「フレームの長所、ですか？」

「ああ、そうだよ。Mk－？は、フレーム本体は勿論、MSの動力パイプまで装甲の中に収めてしまっているからね。あれじゃあ、ビームを食らった時に、いつ誘爆して機体が全壊してもおかしくない。ザクみたいに機体の外にパイプが出ていれば別だけど……これじゃあ、量産機のリペアを前提とした僕の発想が台無しだよ！！」

話を続けている内にまたも興奮してきたのか、ナガノの口調が再度熱を帯びてきた。こうなると、最早彼を止める術は存在しない。

目の前にいるマリアの反応などお構いなしに、ナガノは更に熱弁をふるう。

「でも、それは結果として僕に新たな仕事をもたらすきっかけとなった。ガンダムＭｋ－２がエゥーゴに強奪されてから程なくして、今度はそのエゥーゴ側から、僕に可変型ＭＳの設計依頼が舞い込んだんだ。で、僕は新たに装甲をスライドさせるタイプの可変ＭＳを設計したんだけど……これがまずかった」

「何か、欠点でもあったんですか？」

「まあね。これはエゥーゴというよりもアナハイムの要望だったのかもしれないけれど……彼らの必要としたＭＳと僕の考案したＭＳの設計思想は微妙にずれていたんだ。僕はＭＳを変形させることで戦闘時の瞬発力を上昇させようと考えていたんだけど、先方は変形を、単にＭＳ単独での航続能力上昇に用いるつもりでね。結果、変形はできても大気圏内で長時間空を飛べない僕の機体はクレームをもらい、僕の設計した機体は可変機構を抜きにしてロールアウトすることになったんだ」

「そうだったんですか……」

「まあ、可変機構そのものにも欠陥があったみたいだし、結果としてはよかったんだけどさ……」

ナガノの頭に、自らの開発した金色のＭＳの姿が浮かぶ。ＭＳＭ－１００百式。その設計思想が百年保つようにという願いを込めて設計した機体だが、結果として自分のやりたかった仕事が全てできたわけではない。百式は確かに高性能な機体には違いなかったが、それでも名付け親のナガノ自身、今の百式では百年はおろか、十年

も持たないであろうことは既に気づいていた。

「ちなみに、この話には更なる追い討ちがあってね。僕が設計を投げた可変ＭＳなんだけど……こいつはムーバブルフレームを使用され、皮肉にも、より次世代のガンダムに近い形で完成したよ。しかも、その後に僕はあるＭＳの設計図を見せられて愕然としたんだ。まだ、子供の設計したものだとはいえ、それは僕の理想とした可変ＭＳ像に、最も近いタイプの機体だったんだからね。君たちにも、Ｚと言えば分かると思うけど……」

「Ｚって……まさか、あの噂に聞くエゥーゴの超高性能ＭＳですか！？　あれを子供が……そんなことって……！？」

「それだけじゃないよ。しかも、そのＺを設計したのは誰だと思う？　なんと、あの忌まわしきフランクリン・ビダンの息子だって言うじゃないか。まあ、僕から見ても設計者としての才能は息子の方が格段に上だとは思ったけど……それでも、こんな皮肉な話もないだろう？　で、後は連邦の新型可変式ＭＳの設計なんかにかかわりつつも、結局自分の作りたいものも満足に作らせてもらえない生活が続いてさ。気がつけば、今みたいな状況になっているってわけだよ」

そう言うと、ナガノはどこか遠くを見つめるような目をして、やや大げさに肩をすくめた。

しかし、それにしても、なんということだろうか。かの奇才と称されたＭ・ナガノ博士が、なんと設計の段階で子供に負けたとは。しかも、その子供が、自分のアイデアを盗用した技術者の息子とは。まったくもって、どこまで因縁めいた関係なのだろう。

「あっと……こんなこと話してる場合じゃなかったね。君からもらったデータを使って、早速設計図の見直しにかからなきゃ。コーヒーも冷めちゃったし、今日は変な話をしてすまなかったよ」

一通りの話を終え、ナガノはようやく目の前で呆然としているマリアの姿を認め、そそくさと立ち上がって席を外した。その一方、残されたマリアは、なんとも後味の悪い気持ちのまま、自分の目の前にある冷めたコーヒーを飲み干した。なんだかとても、聞いてはいけないような話を聞いてしまったような気がしたからだ。

※　※　※　※　※　※　※

その夜、マリアはフラナガン機関とその機関が進めていた兵器開発に関する、集められるだけの情報を集めてナガノの作業部屋を訪れた。昨日は恐る恐る開けた彼の部屋の扉が、今日は別の意味で重たく感じる。

「すいません、博士。今現在で集められるフラナガン機関関係の情報を、可能な限りお持ちしました……」

マリアは普通に話しかけたつもりであったが、その声は彼女本人も驚くほど小さなものだった。しかし、彼女のその言葉が終わらない内に、ナガノは椅子を回して彼女の方へと振り向くと、今日のラウンジでの出来事がまるで夢だったかのようにして彼女に話しかけてきた。

「いや、ごくろうさん。それにしても……今日は思わず愚痴をこぼしちゃって悪かったね。あんな話を聞いた後じゃ、僕が連邦やアナ

ハイムに対する復讐のためにアクシズに参加したと思われたかもしれないね」

「えっ……！？　そんなことは……ありませんけど……」

図星をつかれ、思わず背筋をのけぞらせて反応してしまうマリア。そんな彼女の様子もナガノは予期していたようで、全く動ぜずにいつもの口調で切り返す。

「ま、そう気にしなくってもいいよ。少なくとも、半分は本心だし。でもね……僕がアクシズに協力する気になったのは、自分の中でのＭＳに対する答えを出したいからでもあるんだ。否、どっちかって言うと、その気持ちの方が強いかな」

「ＭＳに対する答え……ですか？」

「そうだよ。今の連邦軍は可変ＭＳ全盛期だし、確かにＺはその中でも特に優れた機体だけど、僕は更にその上を行く機体が作れると信じている。宇宙世紀００８０年代後半のこの時代、単体で最強を誇るＭＳはなんなのか。できることならその設計と開発に関わり、その機体が活躍する様を見てみたい……。これは、技術者としては当然の感情だと思うけど？」

そう言いながら、ナガノは椅子から立ち上がってマリアに詰め寄った。無論、彼女に反論するつもりはない。否、むしろ彼女は今の彼の話を聞き、自分が彼に対して抱いていた疑念が取り払われたことに安堵していた。やはり彼は生粋の技術者であり、復讐などという思想は、彼の好奇心探求から比べれば取るに足らないものなのであると。

それからというもの、二人は寝る間も惜しんでニュータイプ専用機のデータを検討しあった。睡眠時間もまともに取れずに疲労ばかりが蓄積し、時にマリアはナガノよりも先に休みを取らせてもらうことも多くなっていった。

一方のナガノといえば、こちらも頬がこけて無精髭が目立つようになってきてはいたが、その目に宿った輝きだけは、日に日に強くなっていった。そして、彼女がナガノと協力するようになってから一週間ほど経ったある日、ナガノは格納庫の奥で眠っていた、とある機体に目をつけていたのだった。

「やあ、こんな場所まで呼びつけて、悪かったね。でも、今日は是非、君にも見てもらいたいものがあってね」

「見てもらいたいもの、ですか？」

「そうだよ。アクシズ製ＭＳのデータを色々と検討させてもらった結果、その中にとんでもない掘り出し物を見つけたんだ。格納庫の奥でくすぶっていたみたいだったから、遠慮なく使わせてもらうことにした」

そう言って、ナガノは格納庫のシャッターを開けるスイッチに手をかけた。鋼鉄製のシャッターが開かれたその先にあるのは、未塗装の状態で放置された一機のＭＳ。曲線の多い、どことなく女性的な雰囲気を持つＭＳである。

「博士、これは……」

「開発コードはエルメス２。機体名称はキュベレイだったかな？サイコミュの小型化に難航して、本体だけ組み上げた状態で放置さ

れていたみたいだけど……こいつは、なかなかどうして優秀な機体だよ」

「このＭＳがですか？　でも、なんだか華奢で、ちょっと弱々しい感じもしますけど……」

「いや、人は見掛けによらないって言葉があるだろう？　ＭＳもそれは同じさ。見た目は確かに華奢かもしれないけど、なんとこいつはジェネレーターが上半身と下半身に、それぞれ分割された状態で搭載されているんだ。だから、下半身を破壊されても、上半身だけで動く事だって可能だよ。それに、肩に搭載されたフレキシブルバインダー……これは、姿勢制御と機体機動を同時に兼ねている。こいつのおかげで、キュベレイは曲芸的な空間機動を可能にしているんだ」

「す、凄い……。私達が旗機の開発プロジェクトを進めるよりも前に、そんな優秀な機体が作られていたなんて……」

キュベレイの存在は、マリアとて知らなかったわけではない。が、失敗作の烙印を押されて封印されていた機体のことなど、ついぞ頭の中から消え去っていた。

もっとも、今のナガノの説明を聞く限りでは、キュベレイは決して失敗作などではない。では、なぜこのＭＳは、完成間近にして放置される形になってしまったのだろうか。最大の疑問は、そこにある。

「あの、博士……。でも、どうしてキュベレイは、こんなに優秀な機体なのに正式採用されなかったんですか？」

「ああ、そのことか。それなら理由は単純だよ。こいつを設計したやつは、サイコミュ兵器に関しての知識は浅かったみたいだからね。なんとかエルメスに搭載されていたビットを、性能はそのままに小型化しようとしたらしい。でも、結局はビットの性能を全て内包したまま小型化させることと、サイコミュの安全性の両立に失敗して……キュベレイの開発はそこで止まってしまったみたいだね」

「もったいないなぁ……。こんなに凄いＭＳなのに、１００％完成する前に、見切りをつけられちゃうなんて……」

「ああ、まったくだよ。でも、こいつを作ったやつは、確かに素質はあったのかもね。もう少し粘り強さと柔軟な発想力を持っていれば、キュベレイをこんな格納庫の奥に眠らせることもなかっただろうに……」

そう言って、ナガノは塗装さえされていない未完成のＭＳを静かに見つめた。兵器に意思などないことは分かっていたが、マリアにはキュベレイのモノアイが、微かに光ってナガノに答えたような気がしていた。

※　※　※　※　※　※　※

格納庫での一件の後、ナガノの仕事ぶりは更に加熱した。サイコミュという専門外の知識が必要な兵器を扱うことに四苦八苦しながらも、なんとかしてキュベレイの設計者が完成させることのできなかった、小型サイコミュの開発を成功させようと務めていた。

こうなってくると、最早チーム内の不和など問題ではなくなって

くる。最初は大型ＭＡの開発にこだわっていたスタッフも、ナガノの仕事振りに影響されて考えを改めたようだった。

もともと、大型ＭＡの開発は、チームαが先に打ち立てたものだった。ナガノのいるチームβの面々がＭＡに拘ったのは、単に些細な対抗意識からに他ならない。

だが、よくよく考えてみれば、同じような機体を作ったところで、それは二番煎じに終わってしまう。ならば、今までの兵器にはない、まったく新しいタイプのＭＳを作ってやろう。その気持ちが、ナガノだけでなく他のスタッフにも伝播したことは、マリアにとっては嬉しかった。

かくして、アクシズにおけるＭ・ナガノ博士のＭＳ設計騒動はひとまずの終焉を迎えた。その後、ナガノの設計したＭＳは正式にコンペティションで発表され、その奇抜な発想は様々な技術者を、とりわけ当初からアクシズで旗機の開発計画を進めていたチームαの技術者達を驚愕させた。

遠距離武装のほとんどを無線式サイコミュに頼り、防御よりも加速性と運動性に重きを置いて、デッドウェイトになるであろうシールドさえも装備しない。摂政であるハマーン・カーンが乗ることを考えた場合、このあまりに防御面を無視した設計思想は、一部の者達からは避難を浴びた。

しかし、機体の追従性の向上そのものにサイコミュを導入したキュベレイは接近戦でも恐るべき格闘性能を誇ることとなり、加えてオールレンジ攻撃が可能なエネルギーＣＡＰ方式の小型サイコミュ兵器、後にファンネルと呼ばれることになるこの武器の存在は、キュベレイを単体で戦況を支配し得るＭＳに仕立て上げていた。ナガ

ノが食事はもとより睡眠の時間さえも削って設計したこの武器がなければ、キュベレイは未だに格納庫の奥で埃を被っていたに違いない。

そして、それにも増してこの機体が制式採用されるきっかけとなったのは、アクシズ摂政であるハマーン・カーン本人が、この機体を気に入ったからに他ならない。以後、彼女はこの機体で第一次ネオ・ジオン抗争終結時まで戦い抜き、同時に戦場では同じくナガノ博士が設計に関わった百式を撃破。果ては因縁のＺガンダムはもとより、その後継機でもあるＺＺガンダムとも実力を拮抗させた。

ナガノ博士にとってはキュベレイを開発することそのものに意味があったのかもしれないが、奇しくも彼が開発したその機体は、彼にとっての復讐を成し遂げる形で戦果を挙げたのである。彼はキュベレイを開発することで、この時代のＭＳという兵器のコンセプトに、新たな一石を投じたのだった。

だが、そんな成功とは裏腹に、キュベレイ開発以後のＭ・ナガノ博士の消息は突如として不明となる。キュベレイ開発以前に肉体を蝕んでいた薬とアルコールの後遺症から急性心不全になって亡くなったともとも言われているが、真相は定かではない。

また、このプロジェクト終了後、マリア・リバーヴィレッジは正式にナガノ博士の公私におけるパートナーとなったようである。彼女もまたナガノ博士と共に行方をくらましてしまったようで、第一次ネオ・ジオン抗争が終結した際に、アクシズ内で彼女の姿を見た者はいない。

しかし、ナガノ博士の残した多大なアイデアは、その後のアクシズ製ＭＳに多大な影響を与えたとも言われている。中にはコンペテ

ィションに破れた上、デッド・コピーのような扱いで採用された機体も多かったようだが、それでもナガノ博士は、常にＭＳの新たな可能性に賭けて仕事をしていたのだろう。

宇宙世紀００８７。それは、ＭＳ開発にとっては、まさに激動の時代であったと言える。この時代、試験的に開発されては歴史の影に埋没して行ったＭＳも数多い。

だが、それらの機体が後のＭＳ開発に大きな影響を及ぼしたことは間違いない。そして、そんな時代を生き抜いた技術者の一人として、Ｍ・ナガノ博士の発想が後の時代に与えた影響は、確かに計り知れないものがあったのである。

## （後書き）

百式の設計者として有名なＭ・ナガノ博士が、実はキュベレイの開発に関わっていた……。

ナガノデザインと呼ばれるＭＳをネタに、『ＭＳ開発秘話』というテーマで某ガンダムサイトに投稿させていただいたこともある作品です。

今回は、当時に指摘された矛盾点を可能な限り修正した上でのお遊びとさせていただきました。

Ｍ・ナガノ博士に関しては、デザイナーである永野護氏をモデルに作られた架空のキャラクターであるということは、Ｚガンダムに詳しい方であればご存知かと思われます。

今回は、そんなナガノデザインのＭＳ達に、全て何らかの形でＭ・ナガノ博士が関わっていたというｉｆ設定を加えて書いてみました。

正直、これは単なるお遊びであり、とてもガンダムの正史と呼べるものではありません。

相方の女性仕官の名前を見ても分かる通り、完全に永野護氏とナガノデザインＭＳをネタに遊びまくった作品です。

ＭＳ開発というマニア向けの設定や、楽屋ネタまで満載に盛り込んだ、戦闘シーンのないガンダム。

かなり読者を選ぶ作品だとは思いますが、たまにはこんなお遊びもアリかと思う、今日この頃です。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6566m/

---

機動戦士Ｚガンダム　～ナガノの逆襲～

2011年10月6日23時02分発行